

山と博物館

第15巻 第4号

1970年4月25日

大町山岳博物館



春の木崎湖 (遠方は鹿島槍ヶ岳)

撮影 (5月上旬) 山本 携 学

木崎湖の自然保護

きびしい冬の寒さから解放されて、ようやく青黒くなってきた北アルプスの連峰は、木崎湖の水面に薄ぼんやりと映る。濃緑の山々が湖面にうつされた夏。アルプスのもみじがふもとまでにおい、船からつり糸がたれる秋の水面。北アルプスから吹きおろす寒風に水面の波形がいろいろに変化する冬の木崎湖。木崎湖は季節によってあるときは女神のように、またあるときははんにゃのように変化する。このように多くの変化に富んでいる木崎湖は、日本各地から訪れる人々で湖畔は一年中にぎわう。しかし、団体できた人たちのあとを見ると、どこでもかまわず穴をほって残りがすやあきかなんなどが捨てられている。ひどいところはなんにもしないでそのまま投げ捨てて行く。よく「木崎湖は、はだしでは歩けない」と言う。ビールびんのかげらがたくさん落ちていてあぶなくて歩けないからだ。木崎湖の西の方には六年ほど前にはたくさん松の木があった。そこはかぶと虫の住み家でもよくもよこりに行った。しかし、いまはその木はサテライトへ行く道をつくるためといって切り捨てられ、そのあとはこげ茶色の赤土が盛り上げられ、見ても目をおおうほどのいたいたしさである。自然の美しさをこわさずに木崎のきれいにすんだ水面や周囲の木に水鳥や野鳥がたわむれ、人間の心のなぐさめになるようなそんなすばらしい木崎湖にしていかなくはないかと思う。

美しい自然を破壊してまで観光客を集めるのではなく、いまのままの木崎湖に日本の各地から美しい自然を求めて、多数の人々が訪れるような湖にしていかなくはないかと思う。

(大町市立第一中学校二年 丸山修司)

スミレ旅日記

― 雑種を追って ―

浜 栄 助

スミレ狂となって十五年、分類、形態、分布、生態などあらゆる面からとり組んだスミレ探索の旅の中で、とりわけ興味を引かれたのが雑種である。そのつもりになって探すと出るわ出るわ数多くの雑種が私を含めて二、三のスミレ狂の方々により相次いで見出されてきた。そのほとんどはまだ公表するにいたっていないが、勝手に和名だけつけて記録にとどめてある。他の植物学者に連絡すると必ずいわれる。信州は雑種が多いですね、フオッサマグナ地帯でもあり激動の要素を多分に持つ地域のせいでしょうか、とか、色々憶測してその所以を求めようと問いかけてくる。私には到底その遠因を説明する力はない。

併し案外考え過ぎかも知れない。本州の中間地帯に信州があるが為に日本中のスミレがたまたまより集り易かっただけの事かも知れない。他国を歩いてみて確かに種類と個体数において信州ほどのスミレ天国は他に見当らない。だから雑種が多いとすれば余り理屈をこねなくともよいことになる。併し雑種が多く出来るということは植物学上非常に重大な事である。こうした雑種を起源として新しい種が形成され、より進化への途が精々発展するとなるとまた楽しからずやである。

雑種の判定

雑種であることの確認には次のような諸点があげられる。

一、形態的に全体や各部分が既知の各種の何れとも判定しがたいもの。

二、野外において明白な既知の種が、混生またはやや離れて生育しており、それらの中、

何れか二つの間の中間タイプのものが存在する場合。

三、雑種は不稔性のものが大部分で、従って株で増殖する傾向が強く両母種よりも大株となつている場合が多いこと、根から不定芽を出し増えることなども特徴の一つである。

四、栽培により観察し、花後の閉鎖花も不稔であればまず間違いないこと。但し稔性の幾分あるものもあり、時には結実良好の例外的なものもある。結実良好のものをみると雑種の起源の新種というものが植物界には少なからずあるに違いないことを考えさせられる。

五、両親の何れが花粉親であつても二、三の実験の結果を通じてみるとほとんど形態的には差がない。

雑種会见記

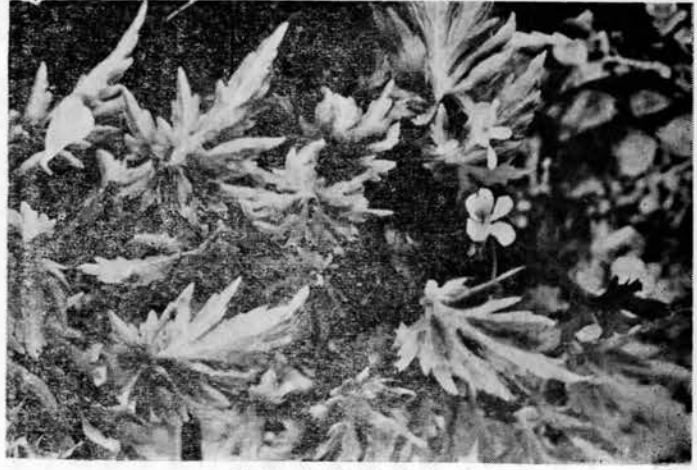
次にいくつかの雑種につきその初見、発見の感激の想い出を記してみたい。

スミレの雑種を語る上において忘れてならないものにスワキクバスミレ(ヒカゲ×ヒゴ)とスワスミレ(ヒカゲ×エイザン)の二つがある。両者とも千野光茂氏により見出され、前者は大正十一年、後者は大正一四年小泉源一氏により発表されたものである。昭和三〇年四月一七日、前川文夫先生が両者の調査のため来諏され、小坂忠二郎氏案内でその探索が行われたが、同行者であつた私にとつてその日がスミレの雑種なるものに始めて会見した記念ある日となつたのである。諏訪市郊外の唐沢山地籍で、菊葉状をした中間形質をもつたスワキクバを、諏訪神社の一角で不規則な欠刻のあるスワスミレを見た時のあの感激が

そのまま今日まで尾を引いてきたのである。

スミレに憑かれスミレ各種の弁別がいくらかついてきた三一年四月一九日諏訪市四賀地籍の山中で、廃道沿いにエイザンスミレの大群を発見小躍りして付近を更に入念に調査していると、明らかに不規則な欠刻のある葉を持つた紅色花の大株に出会つた。付近の他のスミレからアカネスミレが片親であることを確認した。誠に見事な而も小生初発見の記念すべき雑種であるが、残念なことにその後絶滅し、他の地域でもまだ見ていない。

アカネとヒゴとの間種は三九年にいたり熊本県で発見されている。同年五月九日辰野町小野の松林中で大株となつた雑種の群を見出した。紅紫色の花で見なれぬ外形をもつたスミレは、その後二回におたる調査でマキノスミレ×マルバスミレと判明したが、以後他の地域では見出ししていない。続いて五月二二日小坂忠二郎氏と諏訪市有賀で、花はスミレと同じ色と形、葉はスミレの葉を大きくし紅斑を入れたような見事なものを二株見つけたその時は二人ともそれが雑種であることに気がつかなかったが、後年同じものかなりの群を諏訪市角間の落葉松林中で見出し、これがスミレ×チンオスミレであることを確認しアルガスミレと呼ぶことにした。エイザンとヒナの中間種オクタマスミレは比較的全国各地で知られており、私も諏訪、木曾など数箇所での生育を確めているが、最初にみたのは清陵高校上の山林中で三三年の春であつた。白斑の入つたフイリヒナスミレを片親とするオクタマもあつてよい筈と注意していたが、四月一七日遂にこれを諏訪市西部の山で見つけ、その葉の見事にしばし溜息をついたものである。カワギンズミレ(マキノ×エイザン)は昭和二六年頃岡谷市川岸で発見されたが、それが雑種であることが認められたのは昭和三〇年前川先生調査によつてである

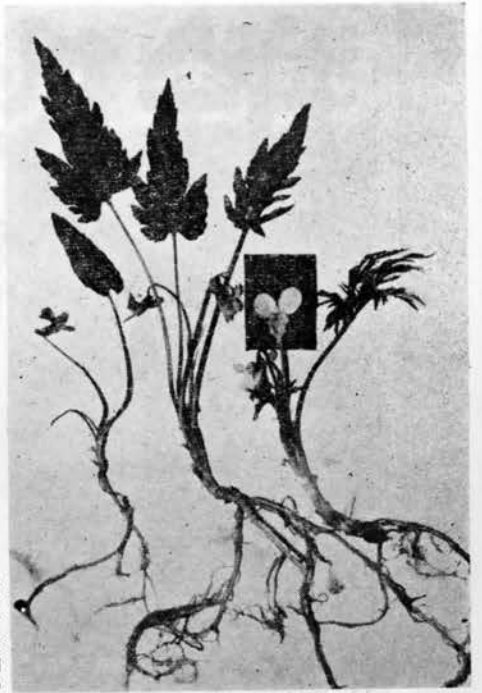


スワキクバスミレ

筆者も何回か足を運んだが、株数が少ないことと花着きの悪いために、現地では花のある個体を見たのは三四年四月一〇日である。

本品も未だに他では発見されていない貴重品で保護を必要とする。三五年六月五日かねて霧ヶ峯にはスミレ、シロスミレと混つてその中間的な花色や形態をもつものがあるといつたのでその実体をつきとめに、折からの霧をついて調査に赴く。教えられた地点には成程この三型のスミレがかなりの量もつて混在し、明らかに雑種形成の状態であり誠に見事である。後、栽培の結果によつてもこの中間タイプは雑種であることが判明したが霧ヶ峯には各所に見られるのでキリガミネスミレと名付けた。

三一年頃小坂忠二郎氏がヒカゲとヒナの中間的な形態で、葉に不明の白斑の入つた面白いものを茅野市宮川の山中で見つけられたが正体は確認ができなかつた。三六年にいたり



マキノスミレ(左) カワギシスミレ(中) エイザンスミレ(右)

判定できる環境に幾株かへイリンジスミレが残存していた。同じ年の五月三日新潟県北部へのスミレ探索行でも同種類のかなりの群をみつけている。翌三九年は雑種について収穫の多かつた年である。

四月二十九日、諏訪市大和の山林で、その昔昭和二六年島津昭氏の発見したニオイタチツボとエゾタチツボの雑種にめぐり会う。多数の株が集団となって咲きはこる有様はまさに壯観である。続いて五月一三日八子ヶ峯の植樹祭の帰路、茅野市米沢の地籍で同じく島津氏発見の(場所は異なる)タチツボ×エゾタチツボの雑種を苦心の末見出した。前者にはニオイエゾノタチツボスミレ、後者にはスワタチツボスミレの名をつけてあるが、こうした有茎性のスミレの雑種は余程スミレの弁別に精通していないと区別が困難である。特徴としては無茎性の雑種同様不稔であり株で増殖するので大株となつてゐることや、形態が中間形を示すことなどであるが、特に片親がエゾタチツボである場合は、花の距の形、花柱上部の肉質突起の有無などに注意することが必要である。タチツボとニオイタチツボの雑種であるマルバタチツボスミレも三六年五月、大町居谷里の温泉付近でみつけている。

四月開花したものをみるとこの花はミヤマスミレの花と誠に似ており葉も欠刻のある広卵状皮針形である所からミヤマ×エイザンの線を考え早速現地へ再調査に行つた所、付近の種類からまさにその通りであることが判断できた。小泉秀雄氏が昭和三年赤石岳登山路で採つた葉縁の切れた葉だけの標本がフグレミヤマスミレとして東大に保存されてゐるが、私見によるとこれが全く霧ヶ峯産のミヤマ×エイザンに類似してゐるので、フグレミヤマは両母種の雑種であると認識してゐる。その後他の地域では見えない。

私は花のある同じそれを茅野市米沢でみつ現地観察からフイリヒナとヒカゲの間種と判断し、フイリオサカスミレと名をつけた四〇年にいたり栃木で神山隆之氏が、ヒカゲと白斑のない普通のヒナとの間種を発見し筆者もこを確認した。

三八年北九州一周の目的の一つは多良岳のフグレシハイスマレ(シハイ×エイザン)であつた。午後になって登りはじめたので頂上付近の外山三郎氏に教えられた場所を夕陽の中で駆足で探し歩いたあげく、帰ろうと思つた土壇場で見出し得た幸運の雑種である。勿論両母種とも健在。一方、諏訪の西山地帯に分布する美しい白斑のある従来長野県の採集家はフジスマレと誤認してきたシハイスマレの一型があるが、これとエイザンまたはヒゴとが交配すると誠に素晴らしい葉と花をもつた観賞価値の高い雑種ができるのだがと何年も夢にえがき、春が来るとその両母種のある辺を探し歩いていた。三九年四月一八日、遂にこれを上社上方の山中で苦勞の挙句発見した時は欣喜雀躍一人で万歳を叫んだものである。

四月二十九日、諏訪市大和の山林で、その昔昭和二六年島津昭氏の発見したニオイタチツボとエゾタチツボの雑種にめぐり会う。多数の株が集団となって咲きはこる有様はまさに壯観である。続いて五月一三日八子ヶ峯の植樹祭の帰路、茅野市米沢の地籍で同じく島津氏発見の(場所は異なる)タチツボ×エゾタチツボの雑種を苦心の末見出した。前者にはニオイエゾノタチツボスミレ、後者にはスワタチツボスミレの名をつけてあるが、こうした有茎性のスミレの雑種は余程スミレの弁別に精通していないと区別が困難である。特徴としては無茎性の雑種同様不稔であり株で増殖するので大株となつてゐることや、形態が中間形を示すことなどであるが、特に片親がエゾタチツボである場合は、花の距の形、花柱上部の肉質突起の有無などに注意することが必要である。タチツボとニオイタチツボの雑種であるマルバタチツボスミレも三六年五月、大町居谷里の温泉付近でみつけている。

四月二日今市市で神山隆之氏案内のもとミツモリスミレをみる機会を得た。同品は水島正美氏が昭和二八年木曾開田村三森山で発見したので始りマキノ×フモトの雑種である更に帰路四月二五日群馬県に立寄り神津牧場下のかねて里見哲夫氏より送られ正体不明のままであつたエドスミレ(スミレ×エイザン)によく似た雑種の調査にあたる。その結果葉裏の紫色

三九年五月三十一日、水島正美氏を迎えて下諏訪から東俣を通り霧ヶ峯へと採集が行なわれたが霧ヶ峯近くの原始林中の山道で、花後ではあつたがオクタマスミレと思われる雑種があり採集してきた。併し鉢栽培をしてみるとその夏葉は大きざや形の点でオクタマとや異り、疑問のまま翌年の春を迎えた。四〇

三九年五月三十一日、水島正美氏を迎えて下諏訪から東俣を通り霧ヶ峯へと採集が行なわれたが霧ヶ峯近くの原始林中の山道で、花後ではあつたがオクタマスミレと思われる雑種があり採集してきた。併し鉢栽培をしてみるとその夏葉は大きざや形の点でオクタマとや異り、疑問のまま翌年の春を迎えた。四〇

三九年五月三十一日、水島正美氏を迎えて下諏訪から東俣を通り霧ヶ峯へと採集が行なわれたが霧ヶ峯近くの原始林中の山道で、花後ではあつたがオクタマスミレと思われる雑種があり採集してきた。併し鉢栽培をしてみるとその夏葉は大きざや形の点でオクタマとや異り、疑問のまま翌年の春を迎えた。四〇

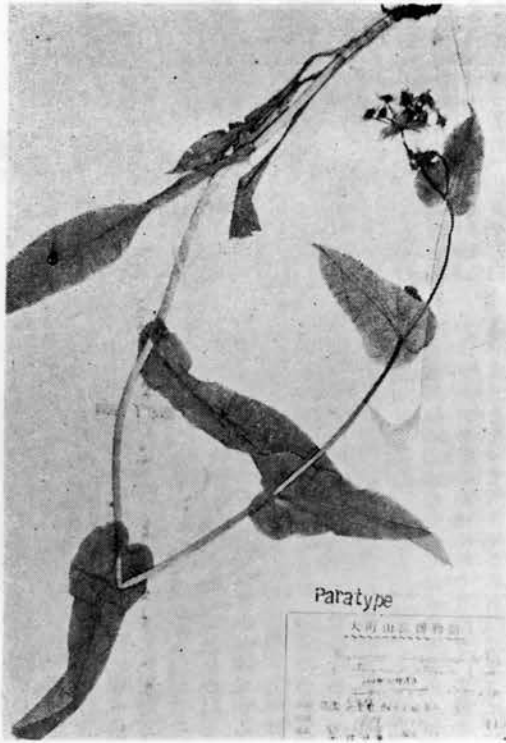


オクタマスミレ(上)とフイリオクタマスミレ(下) (洪原図)

シナノサイコ

高橋秀男

横浜国立大学教育学部生物学教室の北川政夫先生が、一九五〇年の大町山岳博物館が開館準備期間中、白馬村八方尾根と小谷村金山で採集したハクサンサイコ(セリ科・ミヤマサイコ属)の一形にシナノサイコ *Bupleurum nipponicum* f. *stenolobis* として、一九六九年植物研究雑誌に命名記載したものである。全体はハクサンサイコより葉の巾が広く、むしろホタルサイコに似ているが、小総苞片は大きくハクサンサイコのようにある。また総苞片も細長く数が多い。八方尾根のものがタイプ標本として東京大学理学部の標本庫に取めら



シナノサイコ(北安曇郡小谷村金山産)

れた。

今のところ、前記二点しか採集されていないが、こんご同じような形質をそなえたものが数多く採集できれば、更に検討を必要とする種類である。

シナノサイコの母種になるハクサンサイコは、本州中部地方以北亜高山帯の、主に蛇紋岩地の草原に生育している。(神奈川県立博物館学芸員)

(前頁より) ことが観察されている。ぼつぼつ出つくしたかと思われた間種も、またまた新品が四二年四月一五日、諏訪市福沢山下の畑の草堤でみつかった。

此の他独特のノジスミレの小型のもの、ゲンジスミレの交配したもので四、五株位であったが、葉と花と花と花とに愛すべき一品で、フクザワスミレと名づける。

雑種仲間

スミレを追っている中に同好の士となつた奥原弘人氏や、栃木の神山隆之氏の雑種追及に関する活躍もまた特筆すべきものである。

奥原氏は三四年木曾三岳村でサクラ×マキノのオクハラスミレと、木曾駒山麓でスミレ×フモトのコマガタケスミレとを、四〇年南木曾町でスミレ×マキノのナギソをそれぞれ日本で最初に見出すと共に、前述したようにキノスミレの正体追求にも努められており、またタチツボスミレ系の雑種についても知見を深めておられる神山隆之氏もフモト×サクラ、フイリフモト×サクラ、フイリフモト×チシオなどや、ノジスミレ×オカスミレ、スワスミレの色々な型、等々数多くの雑種の発見や追及に多大な成果をあげている。

また従来野生のスミレの人工交配は至難の業とされているが、横浜の鈴木吉五郎氏が二三の雑種作成に成功され、最近では平塚市の望月昇氏がこれに打込み、ヒゴ×エイザンを始めいくつもの雑種を次々とつくり、研究されて筆者に連絡して下さっており、天然産のものとの比較研究に大いに役立っている。また更に同氏は雑種中からより形態のすぐれているものを育成することにより日本産スミレの園芸化をも試みている。



ミツモリスミレ

最後に

以上、信州を中心として進んでいるの如き感をおえる雑種追及の概略をたどって見たが、現在、私なりきの統計では県下のスミレは、種が三三、亜種二、変種一、品種四五、雑種三四の計一二五種である。如何に雑種が多いかが、これを以てしても測り知ることができよう。何か判別し難いスミレが産出した場合には、何卒筆者の所までお送り下さるよう祈念して筆をおくことにする。

動先 岡谷市岡谷東高校
自宅 茅市茅野二、八八三

山と博物館 第15巻第4号
発行所 長野県大町市TEL 〇二一
印刷所 大町山下仲町山岳博物館
大糸タイムス印刷部
定価 年額 三〇〇円(送料込)(切手不可)